

## 古代戦車研究二書

川又 正智

Littauer, Mary Aiken・Crouwel, Joost H. 共著 Morel, J. 画 *Wheeled Vehicles and Ridden Animals in the Ancient Near East (Handbuch der Orientalistik 叢書)* 1979年 Brill (Leiden) 刊 185ページ 85図  
価 140 ギルダー

Piggott, Stuart 著 *The Earliest Wheeled Transport—From the Atlantic Coast to the Caspian Sea*  
1983年 Thames and Hudson (London) 刊 272ページ 142図 価 20 ポンド；および Cornell University  
Press (Ithaca, N.Y.) 刊 価 34.95 ドル

古代にも戦車と我々の呼ぶものがあった（どの言語でもタンクとおなじ名称なのではないが）。欧米の学界ははやくから古代戦車をふくむ車輛の類に興味を持ったようで、研究もさかんである。これは彼らの古典文物に戦車がしばしば登場することと、馬問題と共に、彼らの祖である印欧語族問題との関連を予想したからであろうか。馬車の使用はさかんであったし、現在の動力車輛もその伝統から出てきた。しかし東アジアにおいては古典の注釈家をわずらわしてきたものの、たとえば大正はじめ（松井等、「東洋学報」II-3）の論調からみると、当時あまり理解されてはいなかったもののようである。殷墟発掘後認識は変わったとはいえ、その後の研究発表数は欧米に比するとすくない。

これらの研究が一段落したのは1960年前後である。ハンチャール氏、チャイルド氏達が西アジア～ヨーロッパの車輛に一応のまとめをし、東アジアのものについても林巳奈夫氏（「東方学報」XXIX, 「考古学雑誌」XLIX-3・4等）、吉田光邦氏、フォン・デヴァル氏、ニーダム氏達の成果があった。そしてこのころまではわりとドイツ語による発表が目だったのにこれ以後は英語による発表がおおくなった。そして四半世紀，“チャイルド後25年”を冠した論文も出（Piggott, *Univ. of London, Inst. of Archaeology Bull.* 16）、さらに我々は表記の総合的2書を得たわけである。この前後から馬と車関係の単行本出版がつづいている（Crouwel 1981, Azzaroli 1985 など）。この間には戦車の製作と使用実験もあらたにおこなわれ、重要なこと

が知られた（Spruytte 1977, Coles 1979）。全体としては古代戦車が実用品であったとかがえられるようになってきたのは大きな変化である。ここで取りあげる3人の著者はこの英語時代の代表者と言ってよい。両書とも出版されて数年たち、書評もすでにあるが（A.J.A. LXXXV-2, *Antiquity* LIV, A.J.A. LXXXVIII-3, *Antiquity* 222, P.P.S. L），日本ではこの問題を取りあげることはすくないのでここに紹介する。紹介者は古代戦車の完成の過程に興味を有しており、その点から以下に述べる。

両書とも題名どおりの総合的な書物で、最初には術語集などの基本的説明がある。車輛や馬、馬具についての部分名称や機能は門外漢にはわかりづらいものであるので、大変たすかる。基本的説明はピ氏の方がよりくわしい。ただ両書ともこの部分にも図解が欲しいところである。

まず、リ・ク両氏共著の方からみると（この両氏はこの課題に関して共著発表多数があり、特にトゥト・アंक・アメン墓出土実物戦車の詳細な大型本は我々を益するところ大きい、Littauer and Crouwel 1985）：

第Ⅰ章 序説 1960年ころから新資料の増えたことが述べられる。

第Ⅱ章 術語集

第Ⅲ章 一般的考察 車輛の起原として、橇、コロ、曳き棒（travois）が論じられる。現存の資料から推定すれば、前第4千年紀メソポタミアで、橇—コロからとなる。ウルク第IVa層出土タブ

レット象形文字が最古の資料である。また一軸衡式の牽引法は牛にはじまる。非戦闘的騎乗ははやく前第3千年紀からある、と。

#### 第Ⅳ章 前第4千年紀後半

以下アレクサンドロス遠征まで章題のそれぞれの時代ごとに、車輛（四輪車と二輪車）、その牽引動物、装絡法、装勒法、御法、使用法、騎乗法、が遺物文献両資料をもちいて述べられ、さらに章の要約がつく。

#### 第Ⅴ・Ⅵ章 前第3千年紀前・後半

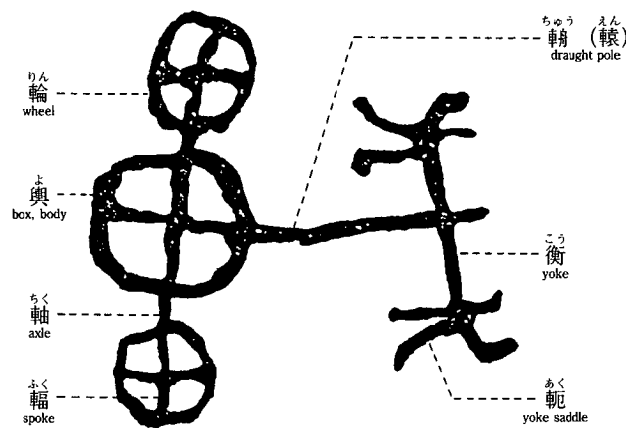
#### 第Ⅶ・Ⅷ章 前第2千年紀前・後半

#### 第Ⅸ・Ⅹ章 前第1千年紀前・後半

馬の飼育はドニエプル・ドン地方で前第4千年紀にはじまる。これは最近20年の学界の成果である。ウマ属動物の各種とその雑種を図像や骨から区別するのは非常にむづかしい。前第3千年紀の車輛には二輪車と四輪車があり、二輪車には平台式（前方に高い胸板の付くのが多く、腰掛付もある）と軸の延長部に立ってまたがる跨軸式とでも呼ぶべきものがある。古代車輛が一軸式で衡により動物に牽かせる（輿中心前方に1本のながえが出ており、ながえに直交する横木に左右の動物をつける）のは、後代の二轅式（輿両側から前方へ出ている2本のながえの間に動物をいれる、ながえでなく現代のように革紐でも同原理）とは大きくことなっている。この点映画「ベン・ハー」の

競走戦車は古代式でない。前第3千年紀の車輛は小型のうえ、ウマ属とはいえ非ウマである驢又は半驢に牽引させ、車輪は板車輪で——ただししばしば予想される丸太輪切の車輪などは無い——戦場でも使用されていることがあるが（投槍の台の可能性もある、著者はバトル・カーと呼び、チャリオットと区別している）戦車としてはまだ完成されていない。前第3千年紀末ころから車輪が大きく、しかしうすく、つまりかるくしようとする努力もあり、輻式への萌芽がある。ウマの車への利用もはじまりかけているが、雑種をつくるためもあり得る。

前第2千年紀にはいると（第Ⅶ章から頁数も増える）、輻式輪ができ、輪径も大きく、軌間もひろくなり、安定と共に横に2人ならんで乗る幅を得る。二輪車の跨軸式はすたれ、平台式も胸板や腰掛はなくなり、ウマはなじみのものとなった。つまり古代戦車基本型——一軸二輪輻式で馬牽引、後方乗車で立乗、金属衡使用——は前第2千年紀前半からなかばころに完成する。金属衡の使用はこの中では最後に出現する要素で、前第2千年紀なかばころであろう。車上で弓を持つ例が出てくる。また衡に軛（人字形くびき）が付くようになる。この基本型完成への道はさまざまな要素を取り入れたものであるとして、従来のように印欧語族のみの力を大きくみる見方をとらないのは本



戦車部分名称

Littauer (P.P.S. XLIII) による南カザフスタンの岩壁刻画

書の特色となっている (pp. 68~71)。騎乗の資料も増えてくるが、馬背後方にのる“ロバ乗”であることから騎馬は驢馬にはじまるとする。メソポタミア人はアッシリア地方かザカフカス地方で騎馬の伝統を持つ民族と出会って、騎兵への道がひらかれて行くとかんがえている。

前第2千年紀後半にはこれまでは輿の中央であった二輪車の車軸が輿の後方に位置するようになり、安定を増した。文献上の戦車台数も多くなり、狩猟にもよく使用され、我々の良く知るエジプトやギリシャやアッシリアの絵画や浮彫にみる——西方型と呼ぶか——戦車の基本が完成する。前第2千年紀後半と前第1千年紀前半は西方型古代戦車のもっともはなやかな時代といえよう。車上の武器としては弓矢・突槍を使用し、盾や甲冑も防禦に使用された。

前第1千年紀には4頭立がまた多くなり、車輛の変化もあるが、騎乗がさかんになることが大きい。“ロバ乗”から馬に適した位置に騎すようになり、騎兵が戦闘に使用されるようになる。弓兵と槍兵があるが、ペルシャ人の力が大きい。当初は2人——2頭1組で、片方は御専門、つまり戦車の2人とおなじ分担であるというのはおもしろい。全体として車・騎・歩という3種の組あわせができてくるわけである。帝王狩猟図もこの時代からのものである。

以上が本書の一部分の紹介である。正誤表が付いているが、これははじめの購入者には無く、後で付けられた。図はすべて線画であるが、細部については一部実物と照合してみる必要がある。索引はない。

さてもう一方のピ氏の本にうつろう。ピ氏の車カフカス発生説は「サイエンス」誌上でわが国にも知られている (原 1968, 訳 1976年11月別冊号)。個人的感慨であるが、紹介者にとって彼の名は、学生時代専門課程にすすんだ時、故西弘海君達と受けた授業のテキストの著者であったので、非常になつかしい。ピ氏はリ氏よりはやく1950年ころから車関係の論考を発表している。題名からわかるとおりヨーロッパに力点があるが、著者自身序によると前述のリ・ク両氏の書につづ

くものである旨を述べている：

第1章 序説：歴史と技術的背景 ここに世界中に関する研究史、近代までの製作技術、工具、5カ国語 (英仏独伊露) の述語表がある。他地域研究者も読むべき章となっている。アメリカ大陸にも車輪付動物偶が出土していることは重要である。

第2章 前第3千年紀末までのヨーロッパ資料

これの多量なのは驚である。東ヨーロッパとメソポタミアの最古の車輛はどちらをふるいとするにせよ時間差はすくない。従来単純にメソポタミアを最古とだけかんがえていた者にとっては、この章は重要であるが、ヨーロッパ遠古史の知識のない者はとまどうことが多い。以下各章はじめには、時代とそこにおける問題の概略がしめされる。図10の土器 (南ポーランド、ファネルビーカー文化) 文様はあるいはウルク IVa 層よりふるいかと述べられるものであるが、車輛の絵だと言いきるにはもっと説明を要するであろう。図14の模型 (スロヴァキア、バーデン文化) もはたして車輛であろうか。

馬飼育を前第4千年紀南ロシア辺からとする最近の説が述べられるのはリ女史とおなじであるが、リ女史とことなり、馬・車問題に関してピ氏は印欧語族の役割を大きくみる。カフカス地方が車輛に関して重要な地であることはわかる。

それにしても古の車輛の絵は、甲骨文の車字にしても、何故平面図風が多いのだろうか、ふしぎである。描者がいつも乗員であったからだろうか。乗車中以外は平面図的にみえることはないわけであるから。

第3章 前期青銅器時代の四輪車、二輪車、馬車

第4章 後期青銅器時代の車輛 我々が漠然と戦車をおもうのはこの段階のものをいう。ヨーロッパ各地の遺物がぐわしく述べられる。

第5章 前期鉄器時代：ハルシュタット文化のヨーロッパと周辺

第6章 前期鉄器時代：ラテーヌ文化とケルト世界 アジアのに比するとヨーロッパの車輛は非常にメカニクな感をあたえる。

第7章 跋 車輛についての技術・経済・社会的問題を現代まで述べる。第1章にあった図1と最後の図142がともに有刃車軸頭付車であるのは偶然なのではあるまい。

全体として文献目録と索引がくわしく、ロシア東欧の記述にくわしいのは有益である。ただハードカバーだが製本はわるく、すぐこわれてしまうようである。こわれたのは紹介者の蔵書だけではない。

ともかく両書を一読すれば、車輛の西アジアにおける発達とヨーロッパへの伝播をかなりこまかく知ることができる。

一方東アジアの車輛をかんがえると、その起原はどうなるであろうか。西から東へ車は駢駢と駆けてきたのであろうか。黄帝か奚仲か相土か、東アジアで発明したのであろうか。

今のところ東アジアに原初的な車輛は見つかっていない。西アジアでの車発展段階と、東アジア（殷商）へ出現したものとは、最近従来知られていなかった青銅製銜の殷における存在がたしかめられたこともあり、構造も年代も、西方型ができる前に西アジアから東アジアへ基本型が伝播してきたものとして説明して矛盾がない。中国文化西方起原説というようなものが成立するかどうかはうたがわしいとしても、古代戦車

は西アジアから東アジアへ伝播したことが確実なものの例であろう。しかもそう仮定した場合、そのつたわる速度は従来かんがえられていたよりもはやいようだ。古代都市というものの中における戦車のあり方、使用法も東西ともによく似ている。

では中間地帯はどう説明されるか。今のところ、西方の中で東アジアの車輛に似た構造のカフカスやウラルの遺物と、点々とある一軸二輪輻式馬牽引（この構造は時代を限定する）の岩壁画が、その資料となるのであろう。（丙寅十一月記）

- Azzaroli, A., 1985, *An Early History of Horsemanship*, Leiden  
 Coles, John M., 1979, (河合信和訳 1985), 『古代人はどう暮らしていたか——実験考古学入門』, どうぶつ社  
 Crouwel, J. H., 1981, *Chariots and Other Means of Land Transport in Bronze Age Greece*, Amsterdam  
 Littauer and Crouwel, 1985, *Chariots and Related Equipment from the Tomb of Tut'ankhamūn (Tut'ankhamūn's Tomb Series VIII)*, Oxford  
 Spruytte, J., 1977, *Etudes expérimentales sur l'attelage*, Paris

本稿提出後、古代戦車完成をあつかう新論文が到着した (Moorey, P.R.S., *World Archaeology* XVIII-2)。この論文は前第2千年紀前半をあつかっている。また Meadow, R. H. et al., 1986, *Equids in the Ancient World (B. T.A.V.O. A-19-1)*, Wiesbaden も馬に関心のある人は見のがせないであろう。



基本型の初期（印章図文）  
 Littauer and Crouwel 1979, fig. 33 より